

賦夕何百韻

二〇〇六年十月六日より

二〇〇七年二月一日まで

於 さいばあすぺいす

一表

しめやかに雨の音聴く月の宴

梢風

点す灯りのよはやや寒く

樂歳

穂芒の野をわたりゆく人ありて

蘭舎

高きにあれば沖の舟見ゆ

風

南吹くいざ旅立へ帆をあげよ

歳

雲に忘るる宿の撫子

舎

青鷺を見むとるならぶうなる髪

風

風の葦原黄金煌く

歳

端なくもまなかひ過る唐衣

舎

振る袖の香は梅とまがひて

暫

ささめごととぎればつなぐ春の雨

李々

弥生うま酒恋に酔ひけり

風

白拍子つれて夢路は波の上

歳

小島ながらも烟をちこち

舎

ひのもとの山は火を吹き里は揺れ

暫

古老の唸る馬道の唄

縹

霜見えて風冴えまざるありあけに

李

近江は氷魚のひかり持つころ

風

年ふらばいづれさびゆく身とはいへ

歳

高麗笛の音にこころ騒ぎぬ

舎

返さるる文いくたびか花篝

縹

こがれ果つれば春のあけぼの

暫

二表

ひとすぢにすがるの消えて行くみそら

風

五色の糸に縫り給へり

歳

六つの山七つの谷も常ならず

舎

歌を枕に西へ東へ

李

もののふの無聊をかこつ鑄刀

鏢

関の声消えただ松の風

暫

椎の葉に盛られしいをのいとはれて

風

皇子さめぎめと都恋ひけり

歳

とにかくに定めなき世の軒を借り

舎

月は雲間にまたしぐるるか

李

物いへばいすかの嘴となるならひ

鏢

ことのは散らす秋風ぞ憂き

暫

通ひ路を埋むもみぢに踏み迷ふ

樂

こころの闇にむしの幽けさ

風

朝ぼらけ鐘の音しるき峯の寺

李

雪とやならむにほのさざ浪

舎

霜の坂二十騎ほどが駆け下る

暫

奏づる琵琶の乱調子にて

縹

めつむれば生死の中をとぶ螢

風

はかなき夢のみじか夜の果て

歳

かくれ家にしらじら残る月の涼

舎

さりとして人を忘れかねつる

李

ふたごころなきを誓ひて髪おろし

縹

法のともしび揺らす春風

暫

散る花のあはく惑へる暮れ方に

歳

宇治の藤波車曳きこむ

風

御簾あげてまろび出でしは陰陽師

李

すは崇徳院怨霊となり

歳

三表

讚岐へは生きて戻れぬ海路なり

暫

やがて明けゆく沖のうき雲

舎

ひかがみにかろきいたみのきざし来て

標

いでや身にしむ萩の上風

歳

くさびらは知らぬと氣負ふ山がつの

風

紫山子揚ぐとて出ではべりけむ

舎

朽ちはてし袖のかたみのくちをしく

李

問はるるままのむかし語りよ

標

吹雪く夜の安達が原のいろり端

暫

ふたつに割れる岩のあやかし

風

をとめごの黒髪梳ける春の歌

歳

白木蓮のたそがれに染む

李

耕しの土の匂ひや月現れて

舎

明日のみのりを神に祈らむ

暫

三裏

徒にても一町ほどの隣村

縹

葦吹く風の苔屋涼しく

歳

ゆらゆらといととんぼてふものの飛ぶ

風

そこはかとなくいのちただよひ

李

たらちねの母に抱かれ見る夢の

舎

大海原に棹させる月

縹

長き夜は銀のしづくも色鈍びて

暫

さざめく声も深草の秋

風

はかなくもつれなき人の旅のはて

歳

東くだりももどかしとのみ

舎

花のこる伊賀の峠を越ゆる今朝

李

霞をぬけて鳥雲に入る

暫

尉と媪一期一会の菜飯茶屋

縹

むなしく過ぎし春はくちをし

歳

名残表

つぶやきの木魂に似たる鏡ぬち

風

諏訪の御渡り走る音聞く

李

けだものの足跡しるき雪三里

舎

たつきとせしは籠貼りの技

縹

菟玖波とて刷毛で糊ぬる反古となり

暫

物忌みをして水辺は見ず

風

をさなごを失ひし地の帰り船

歳

かへりてみばや須磨の紫の戸

舎

聞こえくる一つ緒の琴いづちより

李

僧ただひとり月に物書く

暫

還俗の袍に縫る別れ蚊帳

縹

露置くけさの薄きうつり香

歳

後ろまで粧へる山の迫り来て

風

しじま破りて鹿の子とびでる

李

名残裏

ながらへば身をうき草のうだの庵

舎

浮世のものはなべて見しとぞ

縹

舞ひをへて薪尽きたり能舞台

暫

あかねに染まる横雲の空

歳

児を抱けば癒ゆる病もありにけり

風

まためぐり来る春のうぶこゑ

李

あしびきの山の端花の明けそめて

舎

心延へなるてふてふの群

縹